詩歌をめぐる二三の所見

河　野　庸　二

はじめに

ものものしいタイトルをつけているが，取り上げた題材は至って通俗的なものである。内容としては文学的なものと言語学的なものとを組み合わせた形になっており，「国籍」の点でも期せずしてイギリスとアメリカの両方にわたっている。要は「通俗歌謡」も含めた広義の「詩歌」を扱いながら，随所にささやかなコメントをさしはさんで，エッセー風の短章3つにまとめ上げたつもりである。なお，執筆に当たっては，各章とも，1986年版の *Encyclopedia Britannica*，1965年版の *Encyclopedia Americana*，及び1963年版の *American Peoples Encyclopedia*，の記載事項を参考にしたことをここに明記する。

『ルバイヤート』の功罪

詩人大岡信氏による朝日新聞連載の名コラム「折々のうた」に最近『ルバイヤート』からの一節が登場した。

絶滅のあら野に我等立つひととき，／生の泉にうまし水むすぶ束(つか)の間

オーマー・カイヤム

『ルバイヤット』第三十八歌より。森亮訳詩集『晩国仙果Ⅰ』（平二）所収。中世ペルシャ詩人のこの四行詩集は，一九世紀の英国文人フィッツジェラルドの名訳を得て全世界に無数の愛読者をもつ幸運に恵まれた。ここに流れている無常観・運命観は，イスラム世界のものだが同時に普遍的でもある。日本でも明治時代以来多くの訳が行われ，流麗な森亮訳を得て，真に日本語世界のものとなった。（平成2年10月19日付）

さすがに『ルバイヤート』全編に流れる思想の特徴をわずか2行の引用でとらえ得た名解説であるが，何分にも字数に制限のあるコラムのことである。

事情をよく知らない人が読んだ場合いくつかの誤解が生じかねないのではあるまいか。大岡氏の書き方からすると森亮訳はペルシャ語の原典から訳出された最新の訳ととれなくはない。ところが実際には，大岡信氏に絶賛された森亮訳はペルシャ語の原典からの訳ではなくエドワード・フィッツジェラルドによる英訳からの重訳であり，そのうえ訳された年代もかなり古いのである。その辺の事情については，「岩波クラシックス」中の一冊である小川亮作訳『ルバイヤート』に付された「ルバイヤートについて」の中に詳しい解説がある。

> 最後に今まで出た全訳書の中で最もすぐれたものは，昭和十六年六月「ぐろりあ・そさえて」発行の森亮（もりりょう）訳『ルバイヤート』である。これは最初昭和十四年『コギト』の二月号から四月号まで連載されたものであった。フィッツジェラルド初版本の七五首を収め，訳者自ら蒲原有明の訳がわずか六首に終わっているのを惜しんで，その続稿を書く気持ちで訳したと述懐しているとおり，『有明詩集』をそのままうけ継いだ香り高い訳である。
>
> （中　略）
>
> 以上名訳が数多く出ているのに，何をか厚かましくも駄訳を加える必要があろうとも考えられるが，ただ惜しいことに正しい原典から詩として直接訳されたものがないので，原典によって，ハイヤームの真の姿を多少とも写し出せたらとのはかないのぞみに引きずられて，あえてこの原典訳を試みたしだいである。[1]

小川氏の解説からもわかるとおり，森亮訳は19世紀英国の文人エドワード・フィッツジェラルドの英訳をテキストとするものであり，しかも昭和十年代の発表である。また小川氏によるペルシャ語の原典からの訳自体，同書の「まえがき」に付された「昭和二十二年八月二十日」という日付から推察してもかなり古いものであることがわかる。ところで，マクミラン社のゴールデン・トレジャリー・シリーズ中の1冊である『ルバイヤート・オブ・オマー・カイヤーム』（1905）は，フィッツジェラルドの改訳による定本を中心に，初版本の全文をも収録し，さらには初版から第4版（決定版）に至るまでの訳文の推移のあとをたどる，いわば集注本の機能を兼ね備えた便利な本である。同書により，「折々のうた」に採られた当該の1首を初版から順を追って列挙して，訳書フィッツジェラルドの推敲のあとをたどってみる。

(Edition 1)

XXXVIII

One Moment in Annihilation's Waste,
One Moment, of the Well of Life to taste
The Stars are setting and the Caravan
Starts for the Dawn of Nothing ——Oh, make haste!

(Edition 2)

XLVIII

One Moment in Annihilation's Waste,
One Moment, of the Well of Life to taste
The Stars are setting, and the Caravan
Draws to the Dawn of Nothing ——Oh, make haste.

(the first draught of Edition 3)

XLVIII

A Moment's Halt——a momentary taste
Of BEING from the Well amid the Waste——
Before the starting Caravan has reach'd
The NOTHING it set out from——Oh, make haste!

(Edition 3 and 4)

XLVIII

A Moment's Halt —— a momentary taste
Of BEING from the Well amid the Waste——
And Lo!——the phantom Caravan has reach'd
The NOTHING it set out from——Oh, make haste![2]

森亮訳がフィッツジェラルド訳の初版によるものであることは一目瞭然である（第一，このスタンザが「第38歌」になっているのは初版だけである）。特に詩歌の世界では改訳は改悪につながることが少なくない。フィッツジェラルドの場合少なくともこのスタンザに関しては，改悪とまではいわないまでも，初版本の簡潔で明快な訳は捨て難いのではあるまいか。「折々のうた」に引用された当該の1首の異本を比較するだけでも，森亮氏が訳出の際テキ

ストとして初版本を選んだ理由がある程度わかるような気がする。

ところで，ここに列挙した異本を比べればわかるとおり，初版本における第38歌は第2版以降では第48歌となっているが，それはフィッツジェラルドが初版の75首から第2版以降では101首に増やしたためである。フィッツジェラルドの『ルバイヤート』はいわゆる自由訳である。訳出に当たって彼は，原文を忠実に翻訳するのではなく，原作のもつ雰囲気をできるだけ忠実に伝えることに重点を置き，そのため原典にある個々の歌を取捨選択した上，その配列を自由に変えたばかりではなく，時には2首を組み合わせて1首にしたり，甚だしい場合は原作に無いスタンザを創作することまでしたのである。小川氏の原典に忠実な原語からの訳文を探しても，今問題にしている第38歌に該当する一首は見当たらない。つまり，たまたま「折々のうた」に採られた一節は少なくとも小川亮作訳による『ルバイヤート』の原典には存在しないものなのである。そうと知れば読者は唖然とするはずである。とはいえ，当該の2行を含むスタンザは既述のとおり幾たびかの推敲の過程を経ているのは事実であるから，フィッツジェラルドの『ルバイヤート』に対する執心のほどをうかがうためには格好の資料となるであろう。

フィッツジェラルドの『ルバイヤート』が今日全世界に愛読者をもつのは彼が忠実な翻訳ではなくむしろ創作に近い形で世に出したおかげであるかもしれない。彼の『ルバイヤート』翻訳の意図がどの辺に在ったかをうかがわせるエピソードが前掲の英書の巻末に掲げられたNote By Editorの中に記されている。

> In Stanza LXXXI. (fourth edition), writes Professor Cowell: "There is no original for the line about the snake: I have looked for it in vain in Nicolas; but I have always supposed that the last line is FitzGerald's mistaken version of Quatr. 236 in Nicolas's ed. which runs thus:
>
> "O thou who knowest the secrets of every one's mind,
> Who graspest every one's hand in the hour of weakness,
> O God, give me repentance and accept my excises,
> O thou who givest repentance and acceptest the excuses of
> every one.

"FitzGerald mistook the meaning of *giving* and *accepting* as used here, and so invented his last line out of his own mistake. I wrote to him about it when I was in Calcutta; but he never cared to alter it."[2]

つまり，フィッツジェラルドにしてみれば，原本のテキストにこだわるつもりは毛頭なかったのであろう。森鴎外の訳によるアンデンセン作の『即興詩人』（これはそのドイツ語訳である "Die Improvisatoren" からの重訳である）が原作以上の名文と言われ，すでに原作を越えて，むしろ鴎外の『即興詩人』として愛読されているのと同様に，フィッツジェラルドの『ルバイヤート』もまたすでに原作を離れたいわば「ひとり歩き」の存在であり，しかもわが国においては翻訳からの重訳が今日なお通用する極めて稀な例であろう。しかし一面では，原作からかなりかけ離れているという事実がある以上，極言すればオマー・カイヤームの贋作と言えなくもない。フィッツジェラルド訳によってのみ『ルバイヤート』（もしくは『ルバイヤット』）を知る人は，果たして真にオマー・カイヤームを知ると言えるであろうか。

ヤンキー・ドゥードゥル

最近のアメリカの看護学雑誌に，衛生学的見地から手洗いの重要さを説いた記事が出ており，手洗いに要する時間の目安は『ヤンキー・ドゥードゥル』を口ずさむ程度とあった。この歌が米国で今なお誰一人知らないもののない愛唱歌である証拠といえよう。

…The actual duration of handwashing by nurses and physicians has been observed to be 8 to 13 seconds. For a guide, hum "Yankee Doodle" ——You'll find it takes about 13 seconds. (*American Journal of Nursing*, July, 1989)

ところでこの歌，曲の方はわが国では『アルプス一万尺』の替え歌で知られているあの節である。また，イギリスの伝承童謡としておなじみのマザー・グースの歌としてよく知られた "Simple Simon" 『とんまのサイモン』も同じ曲に乗せて歌われているところを見ると，tune の方も traditional なものなのであろう。元来は instrumental であるとの説があるが，曲の調子

からしていかにも鼓笛隊あたりに向きそうな感じがする。そしてこの種の歌の例に漏れずこの歌の歌詞の方にもさまざまな異同が見られる。例えば研究社刊の『英語雑学辞典』に載せられたものは次のとおりである。

Yankee Doodle went to town,
A-ridin' on a pony,
He stuck a feather in his cap
And called it Macaroni.
Yankee Doodle, keep it up,
Yankee Doodle Dandy,
Mind the music and the step
And with the girls be handy.[3]

なお，歌詞はTom Burnam の原著には載せていないのを，日本語版をつくるに当たって補足したらしい。編訳者によるはしがきの中に「… Yankee Doodleの歌詞は同氏の調査によるものである。」と記して担当編集者に対する謝辞を載せている。原著に歌詞を載せなかったのは，恐らく原著者バーナムがアメリカでは周知の歌であると考えたためであろう。一方，Geoffley Grigson 編による *The Faber Book of Popular Verse* は次のような2スタンザを掲載しているが，いずれのversion もからかい歌であることには変わりなく，殊に後者の第2連は前述のSimple Simon の歌詞と同巧異曲の内容になっている。恐らく，その歌詞の延長として出来たか，あるいは同種のからかい歌と合体して出来た1つのversion であろう。

Yankee Doodle went to town,
He rode a little pony,
He stuck a feather in his hat
and called it macaroni.
Yankee Doodle fa, so, la,
Yankee Doodle dandy,
Yankee Doodle fa, so, la,
Buttermilk and brandy.

Yankee Doodle went to town,

To buy a pair of trousers,
He swore he could not see the town
For so many houses.
Yankee Doodle fa, so, la,
Yankee Doodle Dandy,
Yankee Doodle fa, so, la,
Buttermilk and brandy.[4]

もっとも，この種の歌の歌詞に幾多の version が生ずる現象はきわめて自然なことであり，わが国における一例を挙げれば，宴席でよく歌われる与謝野鉄幹作の『人を恋ふる歌』の第4連，「あゝわれコレッヂの奇才なく／バイロン，ハイネの熱なきも……」は民間では大抵「あゝわれダンテの奇才なく／……」と歌われるのを筆者は観察している。

ところで「帽子に鳥の羽根をつけて／それをマカロニと称した」という歌詞の解釈に当たっては *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* にそのものずばりの説明がある。同書の Macaroni の項の記述によれば「マカロニ」とは a coxcomb すなわち「だて男；しゃれ者」を意味する語であり，1760年頃イタリア帰りのハイカラな連中によってロンドンに設立された「マカロニ・クラブ」に由来する。会員たちは行きつけのレストランのメニューにマカロニを強引に加えさせたという。彼らはまた放埒で，賭博，飲酒，決闘を好み，1773年頃にはテムズ南岸の名所，ヴォクスホール・ガーデンズの鼻摘み的存在であったという。したがって「マカロニ」とは，軽蔑を込めていう「ハイカラ」ほどの意味であろう。同書はさらに語を継いで，

An American regiment raised in Maryland during the War of Independence was called The Macaronies from its showy uniform.[5]

と記している。この記述によってこの歌の歌詞の成り立ちがおぼろげながらつかめてくる。Yankee という語の由来とこの歌の生い立ちについては諸説があるが，ここでは取り上げない。ただ，極めてよく整理された解説としてモリス夫妻の辞書にある Yankee Doodle の項の全文を引用する。

The first Yankees were Dutchmen and the expression "Yankee

Dutch" was used as an expression of scorn by the British back in the early seventeenth century. During the French and Indian War, British General Wolfe was so disgusted with the appearance and lack of discipline of some New England frontier scouts under his command that he derisively nicknamed them "Yankees." The name stuck and when, a few years later, the colonists revelled, the red coats scorned them as "Yankee Doodlers" and sang a song deriding them. The colonists liked the tune and adopted it—— very much the same way American and British soldiers in the World War II adopted "Lili Marlene" from the German foe.[6]

「独立戦争当時イギリス軍側が反乱軍の兵士たちを『ヤンキー・ドゥードゥラー』とあざけったその歌を，反乱軍側が好んで自分たちの歌として愛唱したのは，第2次大戦中米英両軍の兵士が敵国ドイツの歌である『リリ・マルレーヌ』を愛唱したのと同じである」という指摘が特にいい。

フォスターと南部

Stephen Collins Foster (1826-1864) のアイルランド民謡を思わせる甘美で親しみ易いメロディーは，そのScotish-Irish という血筋と関係があるのだろうか。彼は南部を舞台にした数々の名曲を残している。そのため本国のアメリカでもフォスターを南部人であると錯覚する人が少なくないようだが，じつはピッツバーグ生まれのれっきとした北部人なのである。幼少の頃から音楽好きであり，やがて兄の経営するオフィスに勤めるようになっても仕事の合間に作曲を続けていた。彼にとって最初の大ヒットは1848年に出した"Oh, Susanna"であった。1851年に出版された"Old Folks at Home"は最初の一年間で4万部売れた。かくして彼は一躍して押しも押されぬ売れっ子のソング・ライターになった。フォスターがその大部分の歌を作詞作曲しているという点を見逃してはならない。したがって彼の民謡詩人としてのすぐれた一面を忘れてはならないと思う。イギリスのロバート・バーンズに匹敵するという見かたはできないだろうか。例えば，初期の"Oh, Susanna"に横溢するいかにもアメリカ的なユーモアも一流である。

I came from Alabama wid a banjo on my knee,

I'm g'wan to Louisiana my true love for to see
It rain'd all night, the day I left, the weather it was dry
The sun so hot and I froze to death; Susanna, don't you cry.[7]

つまり「スザンナを探しに旅立った日は夜通し雨だった／カンカン照りで凍え死にそうだった」という歌詞の矛盾は，恋人を思い焦がれるあまりに転倒した気持を表現しているのである。したがって，普通行われている「降るかと思えば日照り続き／旅は辛いけど泣くのじゃない」という邦訳は原作のもつユーモアを全然伝えていない。

作曲家としての偉大さはさて置き（筆者は中学時代音楽教室の壁に貼られた音楽年表にバッハ，ベートーベン，モーツァルト，シューベルトのようなそうそうたる大作曲家と並んでフォスターの顔があったのを思い出す。）とにかく詩人としてのフォスターにももっと高い評価が与えられてもいいのではないか。例えば，生計のために乱作を余儀無くされ，同時に酒びたりで身体をこわし，往年の生彩を欠いたとされる晩年のフォスターの唯一の傑作といわれる“Beautiful Dreamer”「夢路より」などは，セレナーデとして書かれた，起承転結の法則に適った，4連から成る立派な抒情詩である。ちなみにこの歌のタイトルを「夢見る君」とする場合があるが，このBeautiful Dreamerは「夢を見ながら眠っている私の美しい恋人よ，目を覚まして私のところへおいで」という呼びかけであるから，「夢路より（帰りて，星の光仰げや）」という邦訳の方がふさわしい。

ところで，“Old Folks at Home”には面白いエピソードがある。
昭和初年に出版された春秋社版「世界音楽全集」17，門馬直衛編，『世界民謡曲集』の巻末に収められた編者による解説の中に次のような一節がある。

> 『故郷の人々』に就いて，作曲者の弟が書いた作曲者の伝記に依れば（Morrison Foster: *Biography, Songs and Musical Compositions of Stephen Foster*），『一八五一年の或る日，ステフエンはPittsburg（ママ）のMonogahelaの堤の上の私の事務所に来て私に云ふた。「南方の河で二つの綴りのいい名がありませんか。私はそれを「故郷の人々」の此の新しい歌に使いたいのです。」私は彼にYazooは如何かと聞いた。「お」と彼は云った。「それは前に用ひられました。」私はそこでPedeeを挙げた。「お，プシヨ！」と彼は答へた，「それはいやです。」私はそこで地図を私の机の一番上から取り下して合衆国の地図を開いた。私達

二人はこれをのぞき込んで，私の指はメキシコ湾に注ぐフロリダの小さい河 'Swanee' で止まった。「これだ，本当にこれだ，」と彼は喜んで叫んで，その名を書き込んだ。そして歌（「はるかなるスウオニー河」(Way down upon de Swanee Ribber.) と始まる）は出来上がった。彼は彼の習慣のように，突然事務所を去った。……そして私は私の仕事を続けた。(以下略)[7]

上の引用文はいかにも素人臭いたどたどしい訳文ではあるが，フォスターの弟（正しくは兄であろう）の手になる伝記の一節だとすると，この曲の生い立ちを知る上の重要な典拠であるので，原著が入手できない今，やむを得ず引用するわけである。ところで，モリス夫妻の『語源句源辞典』の Swanee の項にも同じエピソードが載せてある。

Foster wrote his song in Pittsburgh in 1851 and he set out, as professional songwriters sometimes do, to write another "river" song. The first river he chose to immortalize was the Pee Dee, but the more he thought about that, the less he liked it. …… He then asked his brother, Morrison Foster, to suggest a better-sounding two-syllable name and he came up with Yazoo. Stephen decided that that sounded like a clinker, so he urged his brother to press on further in his atlas. He did and came up with Suwanee, which, since Stephen wanted only two-syllables, was changed to Swanee. …[6]

ところが両者の記載内容には微妙な違いがあることに気付く。「ヤズー」ではどうかと弟からサジェストされた時，前者はフォスターが「その名は以前使ったことがある」と答えたといい，後者はフォスターがその語感を好まなかったとしている。果たしてどちらが真実なのか。さいわい，この歌の成立過程の真相を決定づけるれっきとした証拠が存在している。1963年版の American Peoples Encyclopedia には，フォスターの自筆によるこの歌の original version である自筆原稿の写真版が載せてあるので，それをできるだけ忠実に再現して掲げることにする。

Way down upon de old plantation

Way down upon de Pedee river
　Far far away
Dere's where my heart is turning ebber
　Dere's where my brodders play
　　Swanee
Way down upon de ~~Pedee~~ river
　　Far far away
Dere's where my heart is turning ebber
　Dere's where de old folks stay
All up and down de whole creation
　Sadly I roam
Still longing for de old plantation
　And for de old folks at home[8]

以上の資料を総合することによって，とにかくフォスターが初案のPedeeをSwaneeに改めた事実があることだけは確認できるのである。なお，実在するSuwannee川については既述のトム・バーナムの「英語雑学辞典」に幻滅的な現実の暴露がなされている。

> もしスティーブン・フォスターが実在のSuwannee川を見たら，なんでこんな川を選んだのかとびっくりしたことだろう。全長250マイル（約402キロメートル）のうち，ジョージア州にあるのはわずか35マイル（約56キロメートル）で，しかもオケフェノキー湿原（Okefenokee Swamp）にあるので，川の水はまるでブラック・コーヒーのようだ。そこから200マイル（約322キロメートル）以上曲りくねってフロリダ州を流れ，メキシコ湾に注ぐ。流域のほとんどは湿地帯と密林地帯で，カミツキガメ（Snapping turtle）や水棲動物の棲息地であり，フォスターの歌のように豊かな畑や美しい農園をぬって流れているわけではない。[3]

これは作曲家にまつわる単なる興味本位のエピソードと考えてはならないであろう。フィクションの世界がいかにして誕生するかを示す好例であると同時に，フォスターの詩人としてのすぐれた資質を証拠立てる逸話と考うべきであろう。面白いことに，歌の世界に有り勝ちな事ながら，この歌にも本来のタイトルとは別に“Swanee River”という別名が自然発生している。

わが国においても「靴が鳴る」がむしろ「お手々つないで」として知られ，また，「敦盛と忠度」がいつしか「青葉の笛」のタイトルに変わってしまった例があるのと同じであろう。なお，この歌には後日談とでもいうべきエピソードがある。ジョージ・ガーシュインの初期の歌で，のちに歌手アル・ジョルスンがとりあげてその代表的なヒット・ナンバーとしたジャズ・ソング“Swanee”（アービング・シーザー作詞）は明らかにフォスターのこの曲を下敷きにしている。そしてジョルスンもしきりに指笛を使って鳥のさえずりを表現しながら，スワニーの流域の美しさを讃えて歌ったのである。また，ジョルスン自身顔を黒塗りにして――つまりミンストル・ショー時代のスタイルで歌うのが常であったことを思い合わせると，この名ジャズ・シンガーとこの偉大なアメリカの歌謡作者の不思議なめぐりあわせに今更ながら驚くのである。

ところで，ピッツバーグでソングライターとして名を挙げたフォスターはその後も南部に近づくどころか，やがてニューヨークに居を移しているが，それは彼がその作品の初演権に関する契約を結んでいた当のミンストレル・ショー楽団であるChristy's Minstrelの本拠地がニューヨークにあったためである。フォスターが楽譜出版に先立って，当時の代表的なミンストレル・ショー楽団である同楽団に新曲を初演させる契約を結んでいたのは，楽譜の売れ行きをより確実なものにするためであった。北部人であり，ろくに南部を知らないフォスターが南部の風土や風俗を彷彿させる歌をたて続けに作っているのはそのような事情があるためであるが，そのような離れ業をものの見事にやってのけられる想像力の豊かさこそ，まさしく詩人にとって不可欠の資質の一つではあるまいか。

参考文献

1．小川亮作，『ルバイヤート』，岩波書店，昭和58年
2．*Golden Treasury Series, Rubáiyát* of Omar Khayyám, MacMillan, 1905
3．トム・バーナム著，堀内克明編訳，『英語雑学辞典』，研究社，昭和57年
4．*The Faber Book of Popular Verses,* edited with an Introduction by Geoffery Grigson, Faber and Fabe, 1971
5．Ebenezer C, Brewer, *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable, Revised by Ivor H. Evans,* Cassel, 1977

6. William and Mary Morris, *Morris Dictionary of Word and Phrase Origins,* Harper & Row, 1977
7. 門馬直衛編,「世界音楽全集」17『世界民謡曲集』, 春秋社, 昭和7年
8. *American Peoples Encyclopedia,* Grolier, 1963